

介護殺人 追いつめられた家族の告発

どうして、最愛の人に手をかけたのか？ 在宅介護の壮絶な現実と限界。

介護疲れから、家族が介護者を殺してしまう事件のニュースなどで知っても、そんなことになる前にどうして誰かに相談できなかったのか、周りの人はどうしていたのだらうと、自分とは遠いところで感じていました。

この書は、実際に起きたさまざまな介護殺人事件を扱っており、なぜそのような事件が起きたのか、生々しく、切なく、自分がいつ加害者になってもおかしくない内容ばかりでした。

今、何百人もの人が年金でまかなえる公的な介護施設の入所を待っています。施設側も人手が足りなく、徘徊したり、騒いだり、とても手のかかる人は受け入れてもらえません。そのため在宅介護をするしかありません。在宅介護をすることで介護をする人の経済的な不安や精神的に追い詰められ、長年介護をされている人の多くが、うつ病にかかったり、不眠に悩んでいることが書かれています。長年の積み重ねられてきた背景が衝撃的な殺人になります。誰もが次は自分の番になる可能性があります。在宅介護のありかた、介護者支援の重要性を考えさせられました。

あなたを殺したくて殺したわけではないの。
あなたを愛して愛してたのに、あの日はなぜか…
自分だけが生き残ってごめん（本文より）



新潮社